

第2章 今日も絵筆を手に―アンリ・ルソーと、「素朴」な画家たちの多彩な世界

no.	作者名	作品名	制作年	材質・技法	サイズ (cm)
2-01	アンリ・ルソー	サン=ニコラ河岸から見たシテ島（夕暮れ）	1887-88年頃	カンヴァス、油彩	46.0 × 55.0
2-02	アンリ・ルソー	ブリュマンヌ・ピッシュの肖像	1893年頃	カンヴァス、油彩	92.0 × 73.0
2-03	アンリ・ルソー	散歩（ビュット=ショーモン）	1908年頃	カンヴァス、油彩	46.2 × 38.4
2-04	アンドレ・ボーシャン	家族	1923年	カンヴァス、油彩	130.3 × 100.4
2-05	アンドレ・ボーシャン	写真屋でのジェルメーヌ	1924年	カンヴァス、油彩	102.3 × 65.0
2-06	アンドレ・ボーシャン	地上の楽園	1935年	カンヴァス、油彩	97.2 × 146.4
2-07	アンドレ・ボーシャン	山の中の道	1936年	カンヴァス、油彩	27.7 × 37.5
2-08	アンドレ・ボーシャン	花咲く茂み	1943年	カンヴァス、油彩	50.0 × 60.0
2-09	アンドレ・ボーシャン	にわか雨の中の人たち	1950年	カンヴァス、油彩	35.3 × 46.4
2-10	カミーユ・ボンボワ	花咲く川の支流	1928年	カンヴァス、油彩	15.7 × 25.0
2-11	カミーユ・ボンボワ	緑の中の城	1928年	カンヴァス、油彩	46.0 × 65.0
2-12	カミーユ・ボンボワ	背を向けて横たわる裸婦	1935年	カンヴァス、油彩	50.0 × 65.6
2-13	カミーユ・ボンボワ	川の反映	不詳	カンヴァス、油彩	60.5 × 81.0
2-14	セラフィーム・ルイ	枝	1930年	板、油彩	27.2 × 35.0
2-15	ルイ・ヴィヴァン	ムーラン・ド・ラ・ギャレット	1925年	カンヴァス、油彩	38.2 × 55.2
2-16	ルイ・ヴィヴァン	凱旋門	1935年	カンヴァス、油彩	51.0 × 66.1
2-17	久永強	鬼の現場監督	1993年	カンヴァス、油彩	33.5 × 24.4
2-18	久永強	青年将校、我が指を切る	1993年	カンヴァス、油彩	41.0 × 32.0
2-19	久永強	力尽きて	1993年	カンヴァス、油彩	16.0 × 23.0
2-20	久永強	お化け茸	1993年	カンヴァス、油彩	41.0 × 41.0
2-21	久永強	慰問団来る	1993年	カンヴァス、油彩	41.0 × 32.0
2-22	久永強	霊安室	1993年	カンヴァス、油彩	32.0 × 41.2
2-23	久永強	生ける屍	1993年	カンヴァス、油彩	41.2 × 27.5
2-24	久永強	オイ飯だよ	1993年	カンヴァス、油彩	22.2 × 27.5
2-25	久永強	友よさらば（埋葬）	1993年	カンヴァス、油彩	41.0 × 37.5
2-26	久永強	翼が欲しい	1993年	カンヴァス、油彩	32.0 × 41.0
2-27	久永強	東の国へ渡る鳥	1993年	カンヴァス、油彩	41.0 × 41.0
2-28	久永強	バザールの帰り	1994年	カンヴァス、油彩	33.3 × 24.4
2-29	久永強	白夜の午前零時	1994年	カンヴァス、油彩	32.0 × 41.2
2-30	久永強	耐え忍べダモイ（帰還）の時まで	1994年	カンヴァス、油彩	53.0 × 45.5
2-31	久永強	過ぎ去った50年の風景	1994年	カンヴァス、油彩	27.5 × 41.2
2-32	エーリッヒ・ベデカー	カウボーイ	不詳	木、コンクリート、革、金属	127.0 × 38.0 × 70.0
2-33	フェルディナン・デスノス	ノアの方舟の建造	1950年	イゾレル、油彩	73.0 × 92.0
2-34	ルネ・ランペール	もみの木の向うの家	1957年	板、油彩	19.0 × 32.7
2-35	ルネ・ランペール	見晴し台から見た城	1964年	カンヴァス、油彩	42.6 × 23.8
2-36	ラスティスラヴ・ラコフ	看板	1980年	イゾレル、テンペラ	35.2 × 27.1
2-37	ラスティスラヴ・ラコフ	河岸	1981年	イゾレル、テンペラ	35.2 × 27.1
2-38	オルネオーレ・メテッリ	楽師と猫	1937年	カンヴァス、油彩	75.0 × 55.0
2-39	オルネオーレ・メテッリ	中庭で口論する女たち	不詳	亜鉛板、油彩	67.0 × 51.5
2-40	オルネオーレ・メテッリ	カラーラ通り・・・！	不詳	厚紙、油彩	60.0 × 82.0
2-41	オルネオーレ・メテッリ	田舎を走る列車	不詳	カンヴァス、油彩	67.5 × 92.5
2-42	イヴァン・ゲネラリッチ	ダブル・ポートレート	1964年	板ガラス、油彩	50.0 × 90.0
2-43	ミーヨ・コヴァッチ	焼き物師	1962年	板ガラス、油彩	54.0 × 75.0
2-44	イヴァン・ラツコヴィッチ	散在する集落	1983年	板ガラス、油彩	70.0 × 60.5
2-45	イヴァン・ラブジン	雲	1987年	カンヴァス、油彩	38.0 × 55.5
2-46	エメリック・フェイエシュ	ベオグラードのトルコ人街	不詳	メゾナイト、油彩	58.0 × 74.5
2-47	イリヤ・ボスィリ	海の生物と鳥	1967年	混合技法	66.0 × 101.0
2-48	モリス・ハーシュフィールド	母と子	1942年	カンヴァス、油彩	120.0 × 92.0
2-49	ウィリアム・ホーキンズ	スネーク・レスラー	1988年	メゾナイト、エナメル、トウモロコシ粉、コラーージュ	99.1 × 121.9
2-50	ウィリアム・ホーキンズ	バッファロー 6	1989年	メゾナイト、エナメル、トウモロコシ粉、コラーージュ	106.7 × 121.9
2-51	セネック・オーバン	ロバを喰う	1946年	メゾナイト、油彩	48.8 × 52.1
2-52	カステラ・バジール	キャッサバの準備	1947年	厚紙（メゾナイト上に添付）、油彩	39.3 × 49.8

世田谷美術館コレクション選「器と絵筆―魯山人、ルソー、ボンシャンほか」展示解説&出品リスト　2021年1月5日発行

執筆：塚田美紀　編集：塚田美紀、遠藤望、村上由美　制作：株式会社美術出版社　発行：世田谷美術館　©2021　世田谷美術館

器と絵筆

世田谷美術館コレクション選

展示解説 & 出品リスト

本展では、世田谷美術館のコレクションの柱をなす北大路魯山人の器と、アンリ・ルソーなど「素朴派」といわれる人々の作品をご紹介します。

書画、陶芸、また料亭のディレクションなどを自在に手がけた才人ながら、毀誉褒貶の激しかった北大路魯山人。そんな作家を支援した世田谷の実業家・塩田岩治が、妻サキとともに愛用した味わいぶかい作品は、「塩田コレクション」として当館に寄贈されたものです。

独学で表現を探索した素朴派の画家たち。それぞれに不思議な魅力をもつ作品を描きましたが、それらが世に出るに至った背景には、彼らが生きた時代や地域の特徴が関わっています。

このパンフレットには、展示の章解説と出品リストを収録しました。また、「塩田コレクション」ならではの魯山人作品の見どころや、旧ユーゴスラヴィアとハイチという、とりわけ複雑な歴史をもつ地で生まれた素朴絵画についてのコラムもお読みいただけます。

会期：2021年1月5日（火）～2月28日（日）

会場：世田谷美術館

主催：世田谷美術館（公益財団法人せたがや文化財団）

後援：世田谷区、世田谷区教育委員会

世田谷美術館

SETAGAYA ART MUSEUM

〒157-0075東京都世田谷区砧公園1-2

Tel. 03-3415-6011（代）

https://www.setagayaartmuseum.or.jp

当館には北大路魯山人(1883-1959)の作品が157件あり、「塩田コレクション」として親しまれています。すべて世田谷在住の実業家だった塩田岩治(1895-1983)の旧蔵品ですが、塩田と魯山人はどのようなきっかけで交流するようになったのでしょうか。

1925(大正14)年、魯山人は赤坂に高級料亭「星岡茶寮」を開きます。そこで用いる器を制作するため、翌年には北鎌倉に土地を借りて窯場をつくるものの、水が出ずに困り果てます。そのとき手を貸したのが、塩田でした。利根ボーリング(現・東亜利根ボーリング)を経営していた塩田は、社のすぐれた技術を駆使して、魯山人のために水脈を掘り当てたのです。以来、ふたりの親交が始まりました。

1935(昭和10)年、塩田は東伊豆に利根ボーリング社湯之沢試験所を開設。同社の得意先や、氏と親交のあった人々の宿泊施設にも供された場で、茶室や、利根窯という名の窯場もありました。塩田はそこに魯山人を招き、客人をもてなすための器を制作させ、自身も陶芸の手ほどきを受けました。

1936(昭和11)年、魯山人は星岡茶寮の共同経営者から解雇を言い渡され、作陶だけで生計を立てざるをえなくなります。塩田は熱心な支援者のひとりとして、積極的に作品を購入。暮らしになじむ、穏やかな美しさのあるものが中心でした。また、篆刻、書画、陶磁器、漆器など、作品のジャンルも豊かです。魯山人との「合作」というべき、ほほえましい器もあります。茶の湯を教えていた妻のサキとともに、日々そうした作品を楽しみました。

塩田が世を去った1983(昭和58)年、世田谷では美術館の開設準備が進んでいました。サキは、新しい美術館にすべての魯山人作品を寄贈することを決意します。ただ、愛用品を一度に手放すことをためらい、1985(昭和60)年と、開館年である1986(昭和61)年にわけての寄贈となりました。以来、世田谷美術館ではこの大切な「塩田コレクション」を折にふれて披露し、その存在は国内外で知られるようになっていきます。

塩田岩治と北大路魯山人、そのあたたかな交流

塩田岩治と北大路魯山人の、あたたかな交流。それは、器そのものからもうかがい知ることができます。

欠けてしまった陶磁器を漆によって修復し、金粉で装飾する「金継ぎ」という技法があります。《染付葡萄文鉢》(no.1-15)は、初めから欠けていましたが、塩田が気に入って買い取り、自身で施した金継ぎが、粹なアクセントとなりました。《染付竹文皿》(no.1-16)の金継ぎの線は、魯山人の絵付けの竹と見事に呼応しています。しっかり使い込まれた《織部しのぎ湯呑》(no.1-21)にも、よく見ると金継ぎがあります。塩田は金継ぎをとおして器に新たな風情をあたえ、魯山人に語りかけているようにも見えます。

塩田サキが愛した器たち

夫とともに魯山人の器を愛した塩田サキ。彼女がとりわけ気に入っていた器が、いくつかあります。

《赤呉須水注》(no.1-28)は、手のなかにすっぽり収まるのがいいのよ、と語っていたそうです。他の水注と比べると、たしかに、大きさもかたちも絶妙です。お茶の道具として欠かせない香合では、《志野香合「くづや」》(no.1-40)を愛用していました。甲には、崩れかかった藁ぶきの小屋が描かれています。「くづや」はこの小屋をさすようです。魯山人の奔放な筆づかいを愛でつつ、甲のまるみの心地よさを味わったのでしょうか。茶碗は、貫入に茶渋が深く入るまで使い込んだものと、そうでないものがはっきりわかれています。

魯山人が制作し、塩田自身も作陶を学んだ、湯之沢試験所ゆかりの作品を見てみましょう。《織部ユノサハ銘湯呑》(nos.1-22, 23)は、「ユノサ“フ”では?」と問う塩田に、魯山人が「ユノサ“ハ”と書かないほうが間違っている」と突っ返して生まれたもの。塩田は苦笑したかもしれません。《総織部灰皿》(no.1-24)は、塩田がデザインし、魯山人が制作。《土釜「利根坊耳を作る」》(no.1-26)は、魯山人による釜に、「利根坊」こと塩田が取っ手をつけたものです。コレクターと作家のあいだには、こうしたさまざまな対話がありました。

長らく愛した器について説明するサキの姿を、当館初代館長の大島清次は次のように書き残しています。

「一品一品、愛用の食器をいとおしむ表情には、当然亡きご主人への想いも蘇るのだらうが、未亡人自身、肌で魯山人の作品と長年付合ってきた、門外漢の私などには容易に立入る隙のない、確信に満ちた見識が輝いていた。それは、いとも高価な美術品の、その良さや価値がわかるといった、いわゆる目利きの見識というものではなく、魯山人の希望通り、ふだんの日常生活を通じ、彼の作品を雑器のように使い切った果の見識であり、同時に愛着でもあることが容易にわかる。」

(大島清次「塩田未亡人のこと」、『塩田コレクション 北大路魯山人』、世田谷美術館、1986年)

2 今日も絵筆を手

— アンリ・ルソーと、「素朴」な画家たちの多彩な世界

アンリ・ルソー（1844-1910）に代表される「素朴」な画家たち——とよくいわれるものの、画家がそのように自称したり、仲間を集めたわけではありません。ではいつ、どのように「素朴」な画家というまともは生まれたのでしょうか。

19世紀末のパリ。入市税関の下級官吏ルソーは、独学で絵画制作に励んでいました。美術界の常識をはみ出す表現がアンデパンダン展で失笑を買いますが、20世紀に入ると、一部の芸術関係者の関心を引き始めます。画家のピカソ、詩人のアポリネール、批評家のウーデなど、若く前衛的な人々です。

当時、ヨーロッパは政治的・社会的な転換期にあり、美術界も揺れていました。従来の教育や文化のシステムに汚されていない、「素朴」なものを見つけたい、という欲求が高まるなか、不思議な作品を描く独学の画家ルソーが「発見」されたのです。

その後、「庭師」こと苗木商人のアンドレ・ポーシャン（1873-1958）、サーカスのレスラーだったカミーユ・ボンボワ（1883-1970）、貧しい家政婦だったセラフィヌ・ルイ（1864-1942）などの独学者が見いだされ、1920年代以降は「聖なる心の画家」「20世紀のプリミティヴ」などと紹介されました。第1次世界大戦の惨禍から、ヨーロッパの知識人が理性への不信感を募らせた時代です。「素朴」な描き手や作品は、やがて「純真無垢」「無邪気」な原初存在として、理想化されました。

日本では1966年、「アンリ・ルソー展 素朴派の世界」という、国内初の大規模な素朴派紹介展が西武百貨店で開かれました。その際、小説家の大江健三郎は、「本当に無邪気な芸術というものが、あるだろうか?」と問いかけています。口当たりのよい理想化は、作品の複雑で豊かな力を見えなくさせる、という警鐘でした。

「素朴」とひとくちにいても、個々人が生きた国や地域の歴史を背景に、作品は多様で多彩です。旧ユーゴスラヴィアのように、社会改良や近代化を目指す文脈で、描き手や作品が見出される場合もあります。日本の久永強（1917-2004）の作品は、一個人の身体に刻まれたシベリア抑留の記憶が絵となり、現代史への重い一撃になった例でしょう。作品に裏打ちされた描き手それぞれの人生は、時代の姿を映し出すものでもあるのです。

旧ユーゴスラヴィアの素朴画家たち

第1次世界大戦後に独立し、第2次世界大戦後は独自の社会主義路線を歩んだ旧ユーゴスラヴィア。その一部だったクロアチアでは、1930年代、芸術の社会的役割を重視する一部の若い前衛芸術家が、人口の大半を占める農民への芸術教育に力を入れていました。

画家のクルスト・ヘゲドゥシッチは、パリ留学から帰国後にグループ「^{ゼムラキ}大地」を結成し、大都市ザグレブで展覧会を開く一方、父の故郷のクロアチア北部フレビネ村で、青少年たちに絵を教えていました。1931年のグループ展では、彼らの作品も紹介。そのひとりが、当時16歳のイヴァン・ゲネラリッチ（1914-1992）でした。旧ユーゴの素朴画家の第1世代です。

ヘゲドゥシッチは、中央ヨーロッパの民衆画として広まりつつも廃れてしまった、ガラス絵という古い絵画技法に関心を持ち、パリで学んできました。その影響で、教子のゲネラリッチからもガラス絵を始め、それが旧ユーゴの素朴絵画のシンボルになります。1946年からゲネラリッチが村の芸術活動の指導者となり、1953年パリで

の個展を経て、1955年のサンパウロ・ビエンナーレでは「フレビネ派」として脚光を浴びました。

ゲネラリッチが指導した第2世代に、ミーヨ・コヴァチッチ（1935-）がいます。フレビネ村近郊の農村出身で、1953年、18歳で絵を描き始め、1960年代にはガラス絵を習得、絵で食べていくようになりました。イヴァン・ラツコヴィッチ（1931-2004）は、1950年代半ばに制作を始め、ほどなくザグレブに移住。都市に住みながら、牧歌的な農村風景を描きました。

1952年、美術史家・批評家・画家のディミトリエ・バシチェヴィッチが、ザグレブに農民美術ギャラリー（現・クロアチアナイヴアート美術館）を設立します。以後、バシチェヴィッチは、抽象性の高い作品を描くイヴァン・ラブジン（1921-2008）や、都市風景を描くエメリック・フェイエシュ（1904-1969）といった、新しいタイプの素朴画家を支援しました。また、セルビアの農民として生き、60歳を過ぎて絵を描き始めた自分の父、イリヤ・ボスィリ（1895-1972）の表現も支えました。

ハイチの素朴画家たち

19世紀初め、初の黒人共和国としてフランスから独立しつつも、欧米の干渉を受け続けたハイチ。1915年から34年までアメリカ合衆国に占領され、その後も影響が及ぶなか、1944年、首都ポルトープランスに「芸術センター^{サンクトル・ダール}」が開かれました。英語教師として派遣された米国人画家デウィット・ピーターズが、現地エリートのハイチ人画家などの協力で設立した、芸術教育と作品販売の場です。

ここで農村・都市部の貧しい黒人たちが描く素朴な絵が、ハイチ芸術のシンボルとして流布してゆきます。アンドレ・ブルトンなどフランスの知識人の影響もありますが、より重要な仕掛け人は、米国の著述家セルデン・ロッドマンでした。

米国の独学の黒人画家に関する著作もあったロッドマンは、ハイチに渡って、芸術センターの素朴画家を紹介する『ハイチのルネッサンス―黒人共和国の民衆画家たち』を1948年に刊行。その後芸術センターの共同経営者となり、1951年には、ポルトープランスの米国聖公会の大聖堂に素朴画家たちがフレスコ壁画を描くという、劇的な企画を実現させます。

カステラ・バジール（1923-1966）は、その壁画企画に選ばれたひとりでした。南部ジャクメル出身で、芸術センターの雑用係だったバジールは、24歳となる1947年から絵を描き始め、すぐれた色彩感覚を発揮。米国企業が主催する絵画コンクールなどで受賞を重ねますが、1966年に42歳で病没します。なお、2010年のハイチ大地震で大聖堂は倒壊し、壁画も失われています。

他方、ハイチ北部の古都カパイシャンでは、独学の画家フィロメ・オーバン（1892-1986）が、独立の歴史や占領などの出来事を、数十年にわたって描いていました。1944年、52歳で芸術センターに参加するや、カパイシャンに支部を開いて絵を教え始めます。その弟セネック・オーバン（1893-1977）は、兄のもとで1946年に53歳で絵筆を持ち、オーバン派というべき画風で日常風景を多く描きました。

芸術センター設立に協力した画家たちの一部は、素朴絵画を偏重するロッドマンらの方針に疑問を抱き、やがて脱退して別派を形成します。ロッドマン自身もセンターを退きますが、その後も熱心にハイチの素朴絵画の魅力を発信しました。

出品リスト

第1章　日々したしむ器 ―塩田岩治・サキ夫妻が愛した、北大路魯山人の陶磁器

no.	作者名	作品名	制作年	材質・技法	サイズ (cm)
1-01	北大路魯山人	清泉	不詳	木、胡粉	43.5 × 70.0
1-02	北大路魯山人	天上天下唯我独尊	1940年	紙本墨書	23.7 × 71.0
1-03	北大路魯山人	呉須辰砂葡萄文大壺	1941年頃	陶器	40.4 × 32.0
1-04	北大路魯山人	雲錦大鉢	1940年	陶器	22.5 × 46.8 × 33.6
1-05	北大路魯山人	富士鉢	1935-44年	陶器	12.2 × 24.8
1-06	北大路魯山人	椿文鉢	1940年頃	陶器	10.9 × 22.0
1-07	北大路魯山人	染付福字皿	1937年頃	磁器	2.8 × 21.2
1-08	北大路魯山人	色絵双魚文皿	1926-34年	磁器	2.5 × 22.0
1-09	北大路魯山人	織部かすみ平鉢	1935-44年	陶器	4.0 × 35.7
1-10	北大路魯山人	志野魚文皿	1935-54年	陶器	2.3 × 24.5
1-11	北大路魯山人	染付竹絵水指	1935-44年	磁器	20.1 × 14.0
1-12	北大路魯山人	織部桶鉢	1935-54年	陶器	30.3 × 22.0
1-13	北大路魯山人	瀬戸黒茶碗	1945-59年	陶器	7.3 × 12.5
1-14	北大路魯山人	信楽灰被花入	1945-59年	陶器	16.0 × 18.0
1-15	北大路魯山人	染付葡萄文鉢	1941年	磁器	12.3 × 21.0
1-16	北大路魯山人	染付竹文皿	1935-44年	磁器	4.2 × 35.9
1-17	北大路魯山人	赤絵双魚文皿	1941年頃	磁器	1.8 × 28.5
1-18	北大路魯山人	志野葡萄文平鉢	1935-44年	陶器	3.0 × 34.6
1-19	北大路魯山人	織部土瓶	1949年頃	陶器	9.7 × 15.3 × 12.7
1-20	北大路魯山人	織部湯呑	1935-54年	陶器	9.6 × 8.2
1-21	北大路魯山人	織部しのぎ湯呑	1935-54年	陶器	8.2 × 7.8
1-22	北大路魯山人	織部ユノサハ銘湯呑	1935-44年	陶器	各9.0 × 7.6
1-23	北大路魯山人	織部ユノサハ銘湯呑	1935-44年	陶器	各6.5 × 7.2
1-24	北大路魯山人	総織部灰皿	1935-44年	陶器	6.0 × 16.0
1-25	北大路魯山人	麦藁手飯茶碗	1945-59年	陶器	各7.3 × 10.8
1-26	北大路魯山人	土釜「利根坊耳を作る」	1935-44年	陶器	13.8 × 20.4
1-27	北大路魯山人	赤呉須水注	1927年	磁器	8.5 × 7.3 × 6.5
1-28	北大路魯山人	赤呉須水注	1937年	磁器	7.6 × 8.9 × 7.5
1-29	北大路魯山人	色絵金襴手水注	1940年	磁器	7.5 × 9.2 × 8.0
1-30	北大路魯山人	志野筍筒茶碗	1941年頃	陶器	7.5 × 9.7
1-31	北大路魯山人	志野筍筒茶碗	1941年頃	陶器	7.5 × 9.5
1-32	北大路魯山人	黄瀬戸筒茶碗	1935-54年	陶器	8.3 × 9.9
1-33	北大路魯山人	黄瀬戸筒茶碗	1935-54年	陶器	8.0 × 10.5
1-34	北大路魯山人	皮鯨茶碗	1935-54年	陶器	6.6 × 13.4
1-35	北大路魯山人	刷毛目茶碗	1935-44年	陶器	6.5 × 14.3
1-36	北大路魯山人	赤志野茶碗	1945-59年	陶器	8.0 × 10.5
1-37	北大路魯山人	備前茶碗	1945-59年	陶器	7.5 × 11.3
1-38	北大路魯山人	志野香合「くづや」	1935-44年	陶器	4.5 × 6.5
1-39	北大路魯山人	黄瀬戸香合	1935-54年	陶器	2.8 × 6.0
1-40	北大路魯山人	竹形花入	1935-44年	陶器	27.0 × 9.4
1-41	北大路魯山人	赤呉須独楽蓋向付	1941年	磁器	各8.3 × 12.0
1-42	北大路魯山人	赤呉須徳利	1935-44年	磁器	各12.0 × 9.0
1-43	北大路魯山人	赤玉酒盃	1935-44年	磁器	各2.9 × 4.9
1-44	北大路魯山人	赤玉酒盃	1935-44年	磁器	各3.0 × 4.8
1-45	北大路魯山人	色絵染付鮑形鉢	1935-44年	磁器	6.3 × 29.0 × 20.0
1-46	北大路魯山人	蟹絵平鉢	1926-34年	磁器	各4.0 × 17.2
1-47	北大路魯山人	総織部長平鉢	1935-44年	陶器	5.5 × 42.4 × 21.6
1-48	北大路魯山人	総織部櫛目寿文四方隅切平鉢	1935-54年	陶器	4.2 × 22.6 × 22.7
1-49	北大路魯山人	織部草絵八角深向付	1935-54年	陶器	9.3 × 8.0
1-50	北大路魯山人	織部分銅形深向付	1935-54年	陶器	7.7 × 7.5
1-51	北大路魯山人	織部深向付	1935-54年	陶器	7.5 × 6.8
1-52	北大路魯山人	織部三角深向付	1949年頃	陶器	11.5 × 8.3 × 7.3

・世田谷美術館コレクション選「器と絵筆―魯山人、ルソー、ポーシャンほか」展の出品リストです。
・出品作品はすべて世田谷美術館蔵です。
・各作品のサイズ表記は縦×横、または高さ×幅×奥行です。
・出品作品は都合により変更される場合があります。